日本近代文学会　関西支部
会報　四〇号
二〇二四年一〇月一日

会報

■支部大会のご案内

二〇二四年度 秋季大会

日程：二〇二四年一一月一〇日（日）
場所：甲南女子大学
※　オンラインでの中継も予定しております。詳細については、同封の別紙ならびに、関西支部公式ブログをご確認ください。

【プログラム】
■開会の辞　甲南女子大学　信時哲郎
■自由発表
高浜虚子「朝鮮」における文学者の想像力　都田康仁
長谷川伸「荒木又右衛門」論――小説・講談の受容をめぐって――　原卓史
織田作之助「女の橋」「船場の娘」「大阪の女」における架空の大阪――宗右衛門町における考察から――　淺岡瑠衣
■閉会の辞　関西支部支部長　関肇
■臨時総会
※　懇親会（飲食有）を開催の予定です。

■研究発表

［自由発表要旨］

高浜虚子「朝鮮」における文学者の想像力

都田康仁

高浜虚子「朝鮮」は、一九一一年に『東京日日新聞』と『大阪毎日新聞』で連載され、翌年二月に実業之日本社より出版された長篇小説である。本作では、文学者の「余」が妻と共に植民地朝鮮を旅してゆく。同時代においては、日本が併合してまもない朝鮮という場所を文学の題材としたことが評価される一方で、その描き方が外面的なものに終わっている点が批判された。虚子は本作を「写生主義と小説との愚鈍なる戦闘」の産物だと称している。以上を踏まえ、先行論では、朝鮮を描き出す虚子の写生文の手法の是非が論じられてきた。

「余」は、訪れた場所の歴史的記憶を想起したり、朝鮮の現状を過去の日本と重ね合わせたりする。他方、現実の事情を無視して勝手な想像を膨らませることもある。注目すべきは「余」自身が「文学者」とは「空想」を行なう存在であると言及していること、また「余」の行動が周囲の人物の冷笑によって相対化されてもいることである。すなわち、朝鮮の歴史的記憶の想起と日本との重ね合わせ、現実と乖離した空想は、いずれも文学者による恣意的な営為であるという自覚の上に行なわれている。なおかつ、それらが他者に批判されうるものであることを、本作は明示しているのである。

朝鮮を描き、そこでめぐらされた「余」の思考を記す本作は、それを通して文学者の営為をどのようなものとして提示しているのだろうか。本発表では、虚子の周辺人物や旅の動機となった新聞社の動向などを明らかにしつつ、本作における文学者の描き方の批評性について検討する。文学者の営為と、それが朝鮮という場所において帯びてしまう政治性とを併せて提示する本作は、日本人の「国民性」が問われたこの時代、あるいは作品を通じて一つの人生観を示そうとする同時代文学への批評性を有しているのである。

長谷川伸「荒木又右衛門」論――小説・講談の受容をめぐって――

原卓史

長谷川伸「荒木又右衛門」（一九三六～七年）は、一六三四年一一月、伊賀上野鍵屋の辻で、荒木又右衛門が妻の弟・渡部数馬を助けて、数馬の弟・源太夫の敵・河合又五郎らを討つことを描いた小説である。長谷川文学の代表的な作品のひとつとして、繰り返し研究されてきた。①尊属が卑属のために敵討をすることはできないこと、②岡山藩主・池田宮内少輔忠雄が上意討ちにせよと命じてはじめて数馬は又右衛門の助太刀を得て又五郎を討つことができるようになったこと、以

上の二点が長谷川の独自性とみなされてきた。

しかし、これらの点については、直木三十五「荒木又右衛門」（一九三〇）が、長谷川に先んじて描いている。それゆえ、長谷川の独自性とはいいがたい。そこで本発表では、当該作品は何を典拠としたのかを、直木作品との比較や直木作品の典拠も明らかにしつつ考察していきたい。大名と旗本の争い、徳川幕府の対応などに翻弄される人たちを、又右衛門だけでなく周辺人物も含めて検討したい。

また、長谷川文学は講談との比較も欠かせない。長谷川「生きている小説」（一九五八）は、小金井蘆洲が「伊賀の上野で荒木又右衛門に三十六番斬り」をさせたと指摘したように、講談受容の検討も重要である。蘆洲「荒木又右衛門」（一九二一）を中心に、講談受容の一端を明らかにしたい。本発表では、小説や講談をどう受容したのか、「荒木又右衛門」の成立過程を検討するとともに、又右衛門を取り上げた作品群の中での位置づけも考察していきたい。

織田作之助「女の橋」「船場の娘」「大阪の女」における架空の大阪――宗右衛門町における考察から――　**浅岡瑠衣**

「船場の娘」、「女の橋」、「大阪の女」は、この順番に、それぞれ親子の女性の人生を描いた三部作である。

これら三作品は、「母娘の三代の物語」（細川涼一氏「織田作之助『船場の娘』――大阪船場の母娘三代記」（『京都橘大学　女性歴史文化研究所 CHRONOS vol.31』平成二十一年十月））として、大阪で生きるそれぞれの世代を代表する女性という読みが多くなされてきた。本発表では、物語の要である太左衛門橋に注目して、雪子の半生を描いた物語として読み替えることを試みる。

太左衛門橋に着目をする際に留意しなければならない点は、作之助が「架空の大阪」を描くという点である。ここでの「架空の大阪」とは、描かれた時代には存在したはずの物があえて作品の中では描かれていないということである。そのことについては先行研究でも指摘されている（橋本寛之氏『都市大阪・文学の風景』（双文社出版、平成十四年））上に、本人の口からも同じ事が語られている。作之助が描く大阪は架空であるとするならば、「女の橋」「船場の娘」「大阪の女」の三作品で主に描かれている太左衛門橋や宗右衛門町、船場も架空であった可能性がある。そこで本発表では、太左衛門橋とそこに繋がる宗右衛門町に焦点を当て、当時の街並みで生きていた人々と小鈴と雪子を比較・検討した上で、作之助の言う「架空の大阪」が反映されていたのかを検証する。

この三作品における宗右衛門町は当時の大阪を色濃く反映するための場所として選ばれており、実際には芸妓の養成所の役割を担っていた大和屋の変化をあえて描かないことによって、作品の時代設定当時の宗右衛門町とは異なる一昔前の同町、つまり「架空の大阪」を描いたと結論づけることができる。

■大会印象記　二〇二四年度春季大会

特集　「戦後文学をひらく」

松田樹

「特集　戦後文学をひらく」は、近年の戦後文学に対する注目度の高まりや国内外の政治的な緊張状態を受け、戦後文学者が蓄積してきた議論の歴史を改めて検討し直そうとする企画であった。趣旨文には「今日の研究者が戦後文学を語るとき、どのように歴史的記憶の再編が行われ、何が受容され、何が排除されるのか」との問題提起が掲げられていた。そのテーマの下に、三人の登壇者が報告を行った。

一人目の発表、山戸麻紗子氏による「堀田善衛『時間』における南京事件と国際社会の中の日中関係」は、『時間』という日記体小説を通じて、堀田が中国社会の動乱と発展をいかに捉えていたのかを論じる。『ニューヨーク・タイムズ』などの報道記事が本作に参照されていた事実を辿ることで見えてくるのは、堀田が――さらには、彼の盟友であった武田泰淳はじめ戦後文学者たちが――小説というメディアを複数の言説、複数の時間を繋ぎ合わせる包含的で全体的なメディアとして捉えていたことである。

二人目の発表、木田隆文氏による「外地文学を引揚げる――池田克己と日本未来派の戦後――」は、いわゆる「外地文学」の研究の射程を「戦後日本」にまで拡大する。先行する外地文学研究を「外地が消滅する一九四五年八月までに限定する傾向があり、戦時外地―戦後日本を連続的に検討する視点は希薄であった」と論ずる木田氏は、池田克己を中心とする詩壇のネットワークから、戦前と戦後の連続性を摘出しようとする。一人目の山戸氏の発表とも重なりながら、木田氏の議論は大東亜共栄圏の思想やそれが生み出した中国文学者との分断が戦後の詩壇にまで引き継がれていたことを明らかにした。

三人目の発表、長濱拓磨氏による「梅崎春生と遠藤周作――「第一次戦後派」と「第三の新人」の交渉――」は、梅崎と遠藤の交友関係から、従来は世代を隔てた作家として理解されてきた両者の意外な親近性を指摘する。それを通じて、「第一次戦後派」「第三の新人」といったそれぞれの作家に割り当てられてきた既成の文学史的な意味づけを解体

し、そこに新たな光景を浮かび上がらせようとしていた。

いずれの発表でも、あくまでも実証的な資料調査や細やかな人間関係のネットワークから、戦後文学にアクセスし直そうとしていたことが印象的であった。反面、木田氏が発表の冒頭で簡潔にまとめられていたように、本特集は戦後文学の今日的な意義、さらにはそれを論じる研究者のアイデンティティをも問うものであった。質疑応答の場でも、繰り返しそれに関連する鋭い問いが投げかけられていた。このテーマが、今後さらに深められていくことを期待したい。

特集　「戦後文学をひらく」

星住優太

「戦後文学をひらく」と題された特集では、三本の発表があった。一本目は、山戸麻紗子氏「堀田善衛『時間』における南京事件と国際社会の日中関係」。南京大虐殺を中国人の視点から捉えた「時間」を扱い、堀田が『ニューヨーク・タイムズ』などの言説を参照したことを明らかにした上で、それらの言説がどのように作中で相対化されているのかを考察した発表であった。本作の歴史叙述の方法とは、戦争加害を忘却しつつある戦後日本の中で、堀田がとった抵抗であるという結論であった。資料を作品に導入したと解釈したとき、描かれた物語の意味をどう捉え直すべきかなど、物語を観点とする質問や意見が出た。その意味で言えば、アメリカ側の資料を用いて中国人の視点から、日本の戦争犯罪を描くという作品構造の意味付けが必要となってくるだろう。

二本目は、木田隆文氏「外地文学を引揚げる――池田克己と日本未来派の戦後――」。池田克己の戦前、戦時、戦後の動向を追いながら、戦前から戦後の東アジア文芸ネットワークを概観する発表であった。数々の雑誌を見てゆくことで、池田克己を軸にした人脈関係について丁寧に整理されていた。翼賛体制に迎合し、文学における大東亜共栄圏の実現を目指す池田は、戦後になっても中国との交流への夢想を捨てていなかった。この外地における日本人の責任を顧みない点に批判の眼差しを注ぎつつ、戦後になっても中国体験への内省を深めていた武田泰淳や堀田善衛にも目を向けていた。池田の活動に対して中国側からの応答はあったのかという質問が出た。戦後における戦時の中国表象は散文、韻文を問わず数多くあり、それらを検討してゆくことで、より広い視点での戦後文学の輪郭が見えてくると思われた。

三本目は、長濱拓磨氏「梅崎春生と遠藤周作――「第一次戦後派」と「第三の新人」の交渉――」。遠藤周作が作家として出発した昭和三十年代前後において、梅崎春生が遠藤に与えた影響を見てゆく発表であった。第一次戦後派に分類される梅崎と、第三の新人に分類される遠藤は、それぞれの枠組みに沿った特徴を持ちつつも、戦争小説とユーモア小説を書いた点に共通項があるとしていた。遠藤が九州を舞台にした作品を執筆した際、梅崎の知己を頼ったことにも言及があり、作家同士の私的交流を浮き彫りにしていた。第三の新人という文学史的枠組みを自明視しているのではないか、という意見があった。第三の新人に分類される作家たちは単に日常性に依拠した作品のみを書いているわけではなく、その枠組みの特性は今日において再考されるべきだろう。

■書評

山田哲久　著

『井上靖の歴史的想像力』

高木　伸幸

本書は井上靖の歴史小説を取り上げ、歴史が小説として生成されていく過程で働いた作家の〈歴史的想像力〉を追究した一冊である。第Ⅰ部「歴史小説のはじまり」、第Ⅱ部「歴史小説と歴史学」、第Ⅲ部「史実という陥穽」、第Ⅳ部「様々な歴史小説」から成る。最初期の歴史小説『漆胡樽』（一九五〇）『玉碗記』（一九五一）、歴史小説の代表作として知られる『天平の甍』（一九五七）『敦煌』（一九五九）、大岡昇平との歴史小説論争を起こした『蒼き狼』（一九五九～六〇）、個性的な短篇歴史小説『洪水』（一九五九）『補陀落渡海記』（一九六一）等をそれぞれ俎上に載せている。

いずれの論考も小説本文を様々な資料（史料）と対比させ、井上靖が用いた創作の典拠を説得力ある形で明らかにしている。歴史小説の研究において大切な基礎作業に十二分に取り組んだ研究と言える。

本書はその上で井上靖が資料を如何にして組み合わせ、歴史学者から受けた「助言」をどのように反映させているのかを検証していく。ただなる典拠論に留まらず、歴史小説における作家の創作論へと踏み込んでいるのである。

例えば第Ⅱ部では、経典類が敦煌石窟に埋蔵された理由について「避難説」と「廃棄説」の二つに大別されることを紹介。井上靖は『敦煌』において前者に拠りながらも歴史学者藤枝晃の助言を踏まえ、後者からの批判に矛盾なく応答できるように小説を仕上げていると論ずる。第Ⅲ部では、『元朝秘史』の編者がモンゴルの「開国伝説」の冒頭に「狼鹿配偶説」を書き加えたという内藤湖南の学説に言及。井上靖に与えた影響を推察し、大岡昇平より批判を受けた『蒼き狼』の創作方法を肯定的に見直している。どちらも詳細な資料分析に基づきながら作家の想像力、創作

力に深く踏み込んだ新たな見解を打ち出している。実証的な方法で作家の肉声に迫った歴史小説論として、本書が今後の井上靖研究において必読書となることは確実と言えよう。

井上靖は大岡昇平の批判を受けて、『風濤』（一九六三）『おろしや国酔夢譚』（一九六六～六八）では史実重視をより徹底させたと言われている。本書ではこれらの歴史小説を取り上げていない。〈井上靖の歴史的想像力〉はどのように変容し、発展していったのか。さらなる考察を期待したい。

（二〇二三年一二月三〇日　鼎書房　二七五頁　五〇〇〇円＋税）

大橋毅彦　著

『神戸文芸文化の航路――画と文から辿る港街のひろがり――』

箕野　聡子

大橋毅彦氏の二〇一〇年から二〇二四年に渡る神戸文芸文化の研究成果である。

まずその足掛かりとなるのが、一九二〇年代からの関西学院関係者の動向調査である。同人雑誌全盛期に発行された各種雑誌は多層的で、彼らの同人誌間ネットワークは、カフェ文化を舞台に外部とも積極的に交信し、能登秀夫、及川英雄らプロレタリア文学の傾向を持つ詩人と出会っていく。大橋氏は調査にあたり、当時の「大阪朝日新聞（神戸附録）」の文芸欄「雑草園」に注目された。担当記者には、労働文化協会をはじめ様々な機関と繋がりを持つ者も多く、井上増吉ら無名であった詩人にも注目することで、神戸の〈貧〉の光景も浮かび上がらせた。記者らがその他いくつも文化的な企画を発信し、読者を巻き込む形で神戸文芸文化を先導していたことは特に興味深い。

また、神戸文芸文化が経験した「異なるもの」との出会いとして、演劇・舞踊・音楽・美術などのジャンルとの〈協同〉が論じられた。取り上げられたのが、一九五〇年に西宮で開催された「グランドバレエ〝アメリカ〟」である。ここでは、小牧正英が演出振付を行い、小牧と上海で知りあった朝比奈隆が演奏の指揮を行い、装置衣装を小磯良平が、詩的構想を竹中郁が請け負うというように、ジャンルを異にしている芸術家たちが〈協同〉して一つの作品の創造を目指していた。大橋氏はさらに、芸術家たちの〈協同〉が〈共闘〉へと発展していくものとして「中国現代版画展覧会」を展望される。鯉川筋の画廊発行の機関誌『ユーモラス・コーベ』において竹中郁が、「古い伝統と教養」を正しく継承する版画家として高く評価したのが川西英であるが、その川西を師とした李平凡は、戦後神戸で生じていた中国木刻普及運動を「人民芸術」とし、大衆の文芸として根付かせる努力を重ねていた。これら大橋氏の指摘は、諸芸術の神戸の地での相互浸透の動きを見定めたといえよう。

さらに題目「航路」の示すように、神戸が地域や国家を超え、どのように広がり開かれていくかが、陳舜臣や小田実の作品を通し眺望された。特に小田実の小説『河』からは、神戸の中の異国としての中国、朝鮮のみならず、文化的支配からの脱出を図ったアイルランドの文芸復興運動の存在が見えてくる。

神戸に付随するモダニズム文化の華やかな表層をはがし、細部を見逃すことなく掘り下げていく作業によって、近代神戸の持つ広がりが、時間軸に沿って並べられた全九章により発見されていった。

（二〇二四年三月七日　琥珀書房　二七八頁　二八〇〇円＋税）

岩本知恵　著『安部公房と境界――未だ／既に存在しない他者たちへ』

佐々木　幸喜

「安部作品が既存の価値観や言説や構造を問い直し議論の場に引き摺り出すことによって、境界の攪乱を起こしていること」を示し、「境界を産出し固定化する力に抗する実践として位置づけること」（一〇頁）。本書はこの目的を掲げ、安部公房の六作品を取り上げ、「様々な文学／理論」（二八頁）に基づき、七章で検討していく。序章では、先行研究の整理とともに、「ジェンダー論や身体論をはじめとする」（二八頁）理論が紹介される。このうち、ジュディス・バトラーの主張は五章分で、クラウディア・ベンティーンのそれは四章分で繰り返し言及されており、それらが、著者の論拠の重要な拠り所となっていることがうかがえる。以下、各章を概観したい。

第一章では「赤い繭」（一九五〇）をもとに、安部が身体をどう捉えようとしていたか、それに対する見解が述べられる。著者は、語り手「おれ」が繭に変形していくところに着目し、本作が「身体境界」（五八頁）の問い直しにつながるとみる。第二章では「飢えた皮膚」（一九五一）が取り上げられる。語り手「おれ」は「女」から「衣裳」を剥ぎ取ろうとする。ここに、著者は「衣裳」が「皮膚」を拡張したものと読み、また、「おれ」が皮膚に執着するのはそれが身体境界であり自

他境界であるためだと論じる。第三章では「人魚伝」（一九六二）が論じられる。焦点が当てられるのは「共同体における自他境界」（二七〇頁）である。第四章では「幽霊はここにいる」（一九五八）が検討される。著者は本作が「実在と非実在という境界」（二七一頁）に着目したものであると指摘する。第五章、『他人の顔』（一九六四）で論じられる境界は、「主体／客体」（一七八頁）である。第六・七章では『第四間氷期』（一九五八―五九）が検討される。まず、「生」をめぐる境界がどのように産出され、規定されていくかが確認される。その上で、作中で描かれる「日常的連続感」（『第四間氷期』あとがき）に、どういった抑圧、暴力、非対称性が示されるかが論じられる。

目を見張ったのは、様々な理論に解釈を加えつつ、それらがどのように文学研究に援用できるかを試みているところである。二元化の議論で終わらないように注意を払いつつ、この作業を通して作品を読み解いていくことは、様々な視点から、作品の面白さを見出すことにもつながるだろう。

著者とともに悩んで考え続けたい。そう感じさせてくれる、刺激的な書である。

（二〇二四年三月一三日　春風社　二八六頁　定価四〇〇〇円+税）

■二〇二五年度　関西支部春季大会研究発表募集のお知らせ

日本近代文学会関西支部では、二〇二五年度春季大会における自由研究発表、およびパネル発表を募集いたします。特集は「三島由紀夫のパフォーマンス」です。支部会員の皆さまの積極的なご応募をお待ち申し上げます。

◆日時・会場

二〇二五年六月上旬

龍谷大学大宮キャンパス

※詳細は決定次第、関西支部公式ブログでお知らせいたします。

◆募集人数　自由発表　若干名

パネル発表　若干グループ

◆応募締切　一月一五日（水）必着

◆応募要領　自由発表は、発表題目および六〇〇字程度の（応募段階における）結論まで明記した要旨をお送りください。パネル発表は、発表題目と全登壇者の氏名と役割分担、および一〇〇〇字から一五〇〇字程度の趣旨文をお送りください。科研費プロジェクトの成果報告等も受け付けております。発表者数は企画者に一任いたしますが、関西支部会員を一名以上入れてください。

発表時間について、自由発表は三〇分程度、パネル発表は二時間程度です。応募の際は、必ず連絡先（電話番号・メールアドレス等）も明記し、メール又は封書でお送りください。発表に関して、ご不明の点は事務局までおたずねください。

【応募先】

〒654―8585

神戸市須磨区東須磨青山2―1

神戸女子大学　永渕朋枝研究室内

日本近代文学会関西支部事務局

もしくは、関西支部公式ブログに記載のメールアドレスまで。

■機関誌『関西近代文学』投稿論文募集のお知らせ

電子版機関誌『関西近代文学』の投稿論文を募集いたします。

○第四号（二〇二五年三月発行）の締め切り……二〇二四年一一月五日必着

○第五号（二〇二五年九月発行）の締め切り……二〇二五年五月五日必着

送り先、書式（文字数）等、詳細については、公式ブログを御覧ください。

■事務局だより

◆二〇二四年六月一日の春季大会における総会において、二〇二三年度支部報告ならびに二〇二四年度支部活動につきまして、会員諸氏より承認をいただきましたことをご報告し、御礼申し上げます。

◆関西支部会則の改定について

二〇二四年六月一日の総会において、関西支部会則の一部が改定されました（傍線部を追記または変更）。

第十二条（会費）

会費は、年額三〇〇〇円とする。会費を二年分滞納した場合は、原則として退会したものと見なす。

◆献本のお願い

本会報では、支部会員の皆様が刊行された書籍を対象とする書評欄を設置しております。事務局では、書評を希望される書籍を随

時受け付けております。左記の要領でぜひお送りください。

○対象となる書籍…支部会員の学術的な刊行物で、単著、あるいは支部会員が関わって刊行された書籍

○送付先…関西支部事務局

なお、書評欄への掲載の採否、時期、および書評者の人選については、関西支部運営委員会にご一任ください。

◆会費納入について

未納の方は、**会費三千円**（ただし前年度未納の方は六千円）の納入をお願いいたします。会員へ送付される振込用紙などを使用して納入してください（公式ブログ「会費」を御覧下さい）。二年分滞納されると退会扱いになりますので御注意ください。なお、会費納入は次年度への繰り越しができません。未納分がなく、単年度で三千円以上お振込された場合は寄付扱いにさせていただきます。

◆登録情報変更について

御住所などを変更された方は、「登録情報変更届」で事務局までお知らせください。用紙は関西支部公式ブログからダウンロードできます。

◆二〇二四年度運営委員

支部長 関肇

運営委員長 永渕朋枝

運営副委員長 東口昌央、山根直子

〔書記〕 金岡直子、塚本章子、吉川仁子、原卓史、宮川康

〔名簿〕 武田悠希、八原瑠里

〔会計〕 熊谷昭宏、信時哲郎、花崎育代、天野勝重

〔会報〕 松田樹、禧美智章、武久真士

〔広報〕 高橋啓太

〔企画〕 浅井航洋、佐々木幸喜、矢本浩司、稲垣裕子

◆二〇二四年度『関西近代文学』編集委員

編集委員長 田口道昭

編集主担 渡邊ルリ

編集委員 宮薗美佳、瀧本和成、山本欣司、黒田大河、白方佳果、天野勝重、鈴木暁世

日本近代文学会関西支部事務局

〒654―8585

神戸市須磨区東須磨青山2―1

神戸女子大学　永渕朋枝研究室内

日本近代文学会　関西支部

会報　四〇号　二〇二四年一〇月一日

編集・発行人　関肇

日本近代文学会　関西支部

〒654―8585

神戸市須磨区東須磨青山2―1

神戸女子大学　永渕朋枝研究室内

《第19回 全国大学国語国文学会賞》

❖十蘭作品の多角的・総合的解明を目指す

久生十蘭作品研究 〈霧〉と〈二重性〉

開信介 「小説の魔術師」久生十蘭。その作品群は多様な文体、巧緻な構成といった小説技巧の面で高く評価されてきた。本書は、新資料を含む十蘭の創作全二六八作品を網羅的に調査・分析し、十蘭作品に頻出するモチーフを切り口として、その作品世界を明らめるものである。 **定価3520円**

《第43回 日本児童文学学会奨励賞受賞》

❖〈児童文学〉のジレンマとは

〈児童文学〉の成立と課外読み物の時代

目黒強 明治期における〈児童文学〉の成立過程について、文部省による課外読み物の統制という新たな視座から検討し、課外読み物として正統化されながらも文学としての自律を模索した〈児童文学〉のジレンマを明らかにする。 **定価4950円**

❖南吉生誕百十年記念出版

新美南吉の詩と童話 哀のある愛の世界

谷悦子 南吉の幼年童話と詩が、豊かな空想力・ユーモア・哲学性をもち、子どもの複雑な心と人はどう生きるべきかを描いた童話に新しさがあることを論じた。また、安城高等女学校での教師としての南吉を明らかにした。 **定価3300円**

❖明治中葉、日本人青年が単身、太平洋を渡っていった

野口米次郎と「神秘」なる日本

堀まどか 欧米で日本の伝統的短詩形文学や能楽がそれほど地位を得ていなかった時代に、その価値と本質を解説した日英バイリンガル国際派詩人・野口米次郎の前半生を辿り、同時代に活躍した青年たちの生きざまを探る。 **定価1760円**

❖従前の作品解釈に対し、新たな知見を付与する

横光利一 複層の近代

中川智寛 新感覚派の驍将・横光利一の小説分析を主体としつつ、特に「純粋小説論」と同時期に発表された未検討長篇を多く考究対象とし、問題作「旅愁」へと接続されて行く過程を検証した。横光利一の通時的作品研究を行い、全体像に肉迫する。 **新刊・定価7370円**

❖井伏文学の揺籃期・形成期をうかがう貴重な資料

井伏鱒二未公開書簡集 ある級友への手紙

青木(秋枝)美保・前田貞昭編著 井伏鱒二未公開書簡等一七一点を収録。大正六年に始まる大正期の書簡八十一通、昭和戦前期の書簡二十五通を含みその年代の幅広さから伝記上空白の時期を補う内容を持つ。書簡の翻字に注を加え解説、論考を付す。 **定価6600円**

❖作家の創作方法に迫った作品論を展開

井上靖の文学 一途で烈しい生の探求

高木伸幸 昭和の文豪・井上靖のほぼすべての代表作を取り上げ、その文学全容の解明を目指す。従来の井上靖論には見られない幅広く実証的な作品論とともに、貴重な資料篇（未発表の探偵小説・舞踊劇脚本）を備え、研究史上に新生面を拓く画期的な一冊。 **定価7480円**

❖〝文学〟は文壇作家の小説の中だけにあったのではない

無名作家から見る日本近代文学 島崎藤村と『処女地』の女性達

永渕朋枝 日本近代文学を無名作家群からも見渡せば、メディアにより文学がつくられていった大きな流れが見える。有名作家と無名作家、男性作家と女性作家、作家と読者との双方を見、雑誌を他の新聞雑誌との連関の中で捉える。 **定価5940円**

❖漱石から森見登美彦まで、短篇の構築性を解き明かす論集

問いかける短篇 翻案・童話・寓話

木村小夜 視点人物の錯誤や死角・物語が孕む矛盾・構成上の断絶・変則的な因果の構図や定型からの逸脱・反復の中の変化に着目、原拠や周辺の諸言説との比較検討を通し、漱石から森見登美彦まで短篇の構築性を解き明かす論集。 **定価5500円**

❖秦恒平の全体像にせまる初の本格的論考

秦恒平 愛と怨念の幻想

永栄啓伸 秦文学の基軸は、身内観、死生観、そして人間差別への追求である。貰い子の境遇を乗り越える身内論、「生まれた」母に知らぬ間に「死なれた」喪失感が原点である。本書はこの孤立からの葛藤の軌跡を丹念に考察する。 **定価6050円**

❖近代日本文学の空白を埋める！

近代戦争文学事典 第十四輯

矢野貴一編 書誌、内容を録し、論評を加える。

好評既刊（各税込）

第一輯	品切	第二輯	11000円
第三輯	11000円	第四輯	品切
第五輯	品切	第六輯	品切
第七輯	13200円	第八輯	13200円
第九輯	14300円	第十輯	15400円
第十一輯	16500円	第十二輯	11000円
第十三輯	11000円	第十四輯	10450円

既刊10冊 定価127050円

❖心を満たすためのお菓子

お菓子の日本語文化史

前田富祺・岡村真理子 古典から近・現代までの様々な文字資料からお菓子の名前を採集し、お菓子の製法の歴史ではなく、お菓子の「名前」（菓子名）の文化史を、事典形式で整理した。食べ物や言葉の歴史に興味のある全ての方にお勧め。 **新刊・定価3850円**

〒543-0037 大阪府大阪市天王寺区上之宮町7-6
TEL 06(6771)1467 ／ FAX 06(6771)1508
和泉書院
https://www.izumipb.co.jp
e-mail：info@izumipb.co.jp
いずみ通信呈上
定価は10%税込 (2024.7)